

訃 報

吉田耕作先生を悼む



本学名誉教授吉田耕作先生は、療養中のところ、去る6月20日藤沢市民病院にて急性肺炎のため、御逝去されました。

先生は、昭和6年東京帝国大学理学部数学科を卒業され、一時同大学院に在学された後、昭和8年から昭和17年まで、創設当初の大阪帝国大学の助手・講師として、また昭和17年から昭和28年まで創設当初の名古屋帝国大学の教授として、数学教室の創設に尽力されました。その後再び、大阪大学に移られた後、昭和30年本学理学部教授に就任され、以後昭和44年停年御退官までの14年間、本学理学部数学教室のために尽力されました。

先生の御研究は、関数解析学の分野であります。真に優れた業績を数々残され、世界の指導者として、世界の中心にありました。なかでも有名な御研究は、線型作用素の半群の理論であります。海外から文献が何も入ってこなかった戦後の昭和23年、数学会のジャーナル第1巻に発表された半群の生成作用素を特徴づける論文は、関数解析学の歴史においてまさに記念碑的論文であります。

増 田 久 弥 (数学教室)

米国の大数学者ヒレも同じ年独立して(証明は異なりますが)同じ結果を発表したので、ヒレ・吉田の理論と今日よばれております。この理論において「発展方程式論」といわれる新しい分野が生まれましたが、この分野は今日関数解析学の最も活発な分野のひとつとなっております。さらに、この吉田先生の御仕事は、その後の偏微分方程式論、確率論などの発展の礎となりました。

そのほか2つだけ多くの御研究のうちから述べてみます。昭和11年南雲道夫先生(元大阪大学教授)と共に、世界に先がけて導入された「完備距離環」は、今日バナッハ環とよばれ、現在に至るまで活発に研究がおこなわれております。

本学御退官後先生は新しい演算子法(Operational Calculus)の創造に情熱をもやされました。その御成果は、“Operational Calculus”(Springer)に集大成されています。

そのほかエルゴート理論、マルコフ過程とポテンシャル論、発展方程式論、などの分野で重要な御仕事があり、発表された論文の総数は約200篇に及びます。日本の数学者として最も多産であると思います。

先生の御仕事の特色は、一般性のある美しい理論を作られると同時に、常にその応用を心がけられ他の分野での先生の理論の有用性を示してこられたことです。実際、バナッハ理論はスペクトル理論に、半群理論は熱方程式、波動方程式に応用されたような具合です。

先生は、教育にも大変ご熱心でした。バナッハの理論、シュワルツの超関数論など、海外で重要

な新しい進展があると、すぐにわが国数学界に紹介しました。20冊をこえる先生のご著書はいずれも先生独自のもので、実に明解に書かれて、これらによって新しい数学を学んだ数学者は数知れません。これは日本の数学者のみではありません。昭和40年先生は、先生の御仕事を集大成された著書“Functional Analysis”をSpringer社から出版されましたが、これは関数解析とその応用を扱った世界の最も標準的教科書として、全世界で利用され、以後第6版まで数万人の愛読者をもつにいたっております。これは世界的にみても数学の専門書としてまことに希有のことです。

先生は、大学院生も含めた若い研究者の自主性を大変尊重され、いつも励げまし引立てて下さいました。

本学にうつられた当初、ある院生が「何かいい修士論文のための問題を下さい」と申し出たところ、「いい問題があったら自分でやりますよ。」とおっしゃったそうです。以来、(少くとも当教室の解析系においては)、“研究テーマは自分で選ぶものである”という習慣になりました。

私は先生とOperational Calculusについて2, 3議論をいたしました。先生は上記ご著書“Operational Calculus”の序文に私の名前をあげて下さいました。

私を含め多くの“若い”人を励げまし引立てて下さった例は枚挙にいとまがありません。

先生のスケールの大きさを考えると、自分自身のいたらなさに慚たるを禁じ得ません。

先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。